

修辭の可能性 現象の整理と再現について

柴田 佳美

世の中の前提であるようなことに、普段は疑問を持たない。ある時に、歌がその前提自体に視線を向ける。すると、どこかに潜んでいた異世界のような、現実と隣り合わせの謎めいた世界が現れる。

ここでは、短歌の修辭の可能性について考えたい。その前に、興味深い文章があるので先に触れる。『三木清文芸批評集』（講談社文芸文庫）の「レトリックの精神」より引く。

「芸術は具象性をもたねばならぬからといって、現象を無差別に描かねばならぬのでなく、却ってそれを整理し、その間の聯関を認識し、統一して再現しなければならぬ。」では、どのように短歌の中で現象を整理し再現していけばいいだろうか。ひとつの方法として、世の中の前提となるようなことを、作者独特の論理で入れ替えた歌があると思うのだ。

晩夏光おとろへし夕 酔は立てり一本の塚
の中にて 葛原妙子『葡萄木立』

もし、この一首の中に「不思議なり」といった、作者の感慨を表す言葉があるでしょう。その言葉を加えた途端に作者の存在が顔を出してしまい魅力がなくなる。この歌では、〈私〉の言葉が消え、主体が私から酔に移っている。自発的

な意思をもって酔が立ち上がっているようである。本来酔に意思はない。もちろん立ち上がったりしない。短歌が世の中の前提に触れることで、〈私〉の存在がひどく希薄になった謎めいた世界が現れている。

物事を独特の感性で認識し作者の論理で入れ替え、短歌として再構成している。本稿では、このような歌について考えたい。

*

葡萄園に胸もと白き少女みてみどりのぶだ
うみな熱れいそぐ 影山一男『天の葉脈』

美しく印象深く葡萄をうたっている。葡萄がまだ熟れきっていない季節であることから夏であろう。少女が葡萄園にいる。夏は薄着であることが多い。おそらく少女は胸元が涼しげに開いた服を着ている。「胸もと白き」と清楚な少女の美を色で表現しているが、匂いやかなふくらかさにも読者は思い至る。少女の存在は葡萄が熟れる原因にはならない。しかし、作者は少女と葡萄という具象を芸術作品として短歌の形に再構成するときに、独特の感性で捉え新しい論理を築いている。

続いて、もう少し歌を見たい。

月しろの縁ふち明るめり鳥のこゑ樹こゑにこゑはれて
夜の闇やみふかく 影山一男『天の葉脈』

薄荷はくわ飴喉いごにし沁しみめば今日つきし小さき嘘うその
よみがへり来る 桑原正紀『火の陰翳』

鶴首つるくびに挿さしし水仙すいせんいちりんがねむりたるら
しことりかたむく 桑原正紀『花西行』

咲さきましたたさくらの花はなが咲さきました生なきよ
生なきたき者ものよ生なきよと 狩野一男『悲しい滝』

こんな夢ゆめわれのゆめではありませぬ どう
も枕まくらが見みてゐるユメだ

春はるといふ字あざなを二十ほど書いてごらん雪解ゆきとけけ
水の音ねがするから 福士りか『サント・ネージュ』

いち日はゆつくりと過ぎ一年はすばやく過す
ぎて十年は瞬とび 黒岡美江子『竜神さまの雲』

春はるになり物差ものさししもわずか伸びのびていん本ほんにあ
て本の束つかを測はかりぬ 花山周子『林立』

一首目、叙景じょけいの中に樹きが声こゑを蔵くらうという独特とくとくの認識にんしきを潜ひそま
せている。自然しぜんのスケールの大きさと莊嚴しょうげんさを見事みごとに深こほめ表あらわ

現あらわする。二首目、薄荷はくわ飴いごが過去かこを回想こくわうする入り口いりぐちになつてい
る。薄荷はくわ飴いごの具体ぐたいは読者よきやに想像さうざう力を発動はつどうさせる役割やくわいも担たんう。

四首目、桜さくらの花はなが作者そしやを励げんます。力強ちからづよく、花はなが繰くり返し話はなしし
かける。桜さくらが言葉ことばを話す世界せかいは作者そしやだけでなく読み手よみてにまで

広がる。表現ひょうげんに込められた人生じんせいのメッセージが印象いんげう深い。五

首目、通常つうじょう枕まくらは夢ゆめを見ない。枕まくらのユメとすることで、夢ゆめの混
沌こんとんとした展開てんがいを表現ひょうげんしている。六首目、字あざなを書く作業さくぎやくと雪解ゆきとけ
け水の音ねがすることは、ふつう原因げんいんと結果けつこにならない。春はるの
字あざなに誘さそわれ、謎めいめいた世界せかいに連れて行いかれる。七首目、実感じつかん
する時の長さながさは、実際の時の長さながさと異なる。時間じかん感覚かくかくの不思ふし
議ぎさを、言い切る文体ぶんたいで鮮あざやかやかに表現ひょうげんする。八首目、草木くさきの
伸のびる春はる、物差ものさししまで伸のびる。独特とくとくの発想はつさうをすること、春はる
の持つ力ちからのイメージいめいを導みちき出だしている。

遠とほい春湖はるうみに沈しづみしみづからに祭りまつりの笛ふえを吹ふ
いて逢あひにゆく 斎藤史『魚歌』

謎めいめいた世界せかいを持つ歌うたを読み解とく上で手てがかりにした鑑かん
賞しょうがある。高野公彦『わが秀歌鑑賞 歌の光彩のほとり』

(角川学芸出版)より、右の歌の鑑賞かんしょうの一部いぶを引く。「奇想きさう
であると同時に、きはめて浪漫的な発想はつさうである。笛ふえを吹きな

がら湖底こそこに向むかつて沈しづんでゆく女人おんな、といふイメージいめいが美う
い。例れいへば薬師寺東塔やくしじとうたうの頂すゑきにある水煙すゐえんの中に、横笛よこふえを吹ふ
く天人てんじんがある。あれに似た優美ゆうびなイメージいめいである。」奇想きさうな発

想さうと女人おんなのイメージいめいを言う。さらにこう文章ぶんしょうが続く。「失あは
れた自分の内なる少女しょうじよ、過ぎ去さつた歲月とせがひ、さういつたものを

惜おぼしみつつ、作者そしやは自分の創つくり出した静謐せいへいで華麗わいれいな空間くわんかんに心こゝろ
を遊あそばせてゐるのだ。」まことにそのとおりだと思おもう。斎藤

史しは「歲月とせがひ」を惜おぼしみ、創つくり出した「空間くわんかん」に心こゝろを遊あそばせて
いる。さらに、私は笛ふえの音ねが異世界いせかいに読者よきやを導みちく役割やくわいを担たんつ

ているように思おもう。この鑑賞かんしょうを道標みちすゑに、本論ほんろんで挙あげている歌
の世界せかいに惹ひかれる理由りゆうを考えたい。

『歲月、時間』

歌の中で〈私〉は時間の楔のような役割を果たす。〈私〉が歌の中にいる。すると、その人物の今・未来・過去と想像上の時間に歌が存在する。「われ」「わたし」など主体を表す語がなくても、主語は私と推定される場合が多い。読者は補完して読む。しかし、歌から現実的な〈私〉の陰が薄まると、歌は時間の楔から解放される。

かなかなのこゑは世界が反転をはじめめる合

図いまでもむかしも

桑原正紀『花西行』

「世界が反転をはじめめる」と鮮やかにうたう詩情豊かな作品。感慨と説明的要素を抑え、感覚的に律動的に表現する。洗練された世界が読者を引きつける。おそらく夏の朝か夕方であり、作者にとっての今と昔と読める。記録的な要素を薄めていることで、作者の出来事としてよりも幅広く、読者の想像が膨らむ。「かなかなのこゑ」は具体を超えて読み手の中にあるそれぞれの夏の朝夕のイメージを喚起させている。こうして現れた普遍的なイメージ。これに導かれ「むかし」は一人の人生における時間の楔から解放される。長い歳月を連想させる。感慨をそのまま詠むのではなく、このように心の深いところに潜んでいるものを独自の手法で再現する。すると、作品に普遍的な時間が流れはじめ歌が深まる。ここに魅力がある。

『空間』

本来空間はどこまでも続く。歌に〈私〉が存在すれば空間

はその人物から見た世界になる。こう考えると歌の空間は私前提の限られた空間だ。

みづからの広さに耐へてゐる空のこぼすひ

とつのなみだか鷹は

渡辺松男『雨る』

空が自らの広さに耐えていると仮定したとき、鷹は空の涙のようだという歌意であろう。この歌の中で空は実に広そうだ。叙述と私の気持ちの説明が控えられている。人間の存在が希薄になり、空が人間の視野に収まる範囲を超えて想像されるからだろう。そのような広い空間がこの歌には創り出されている。空間は私から自由の身となり、私の存在よりも先行している。リアリズムをはなれた広がりのはろはろしさが生まれている。その奥に潜む作者の感情の提示に惹かれるのだ。

『主観と普遍、そこそこ』

心の中に抱く美しさなどの感覚とその状況に出会ったときの感慨は、人それぞれだ。歌の中で説明できたとしても共感を押し付けることはできない。個人的な感動を、歌の中で説明をするとしよう。状況理解と共感を求めているような印象になってしまう場合がある。そのため、すつきりしない散漫な歌になると思うのだ。ではどのように、個人的な感動を説明的にならずに伝えられるのだろうか。

水底にしんとしづまる桜森のぞけばしんと

のぞかれてをり 福士りか『サント・ネージュ』

桜の森の持つ生命感と、水の透明感のイメージが実に美しい。しかし、実際に水底に桜の森があることはないし桜が人

を見ることもないだろう。「そのように見えた。そのような気がする」という説明を省いている。そして実世界と違う論理が存在する世界を創り出して桜と水の具象を再現している。その世界に心を遊ばせているのだ。一番作者が感動したであろう、美しさと透明感の説明は抑えている。

自分に身近なものを好ましく思う心があると思う。作者自身を強く感じる歌の場合、読者にとって場面は「そこ」である。どんなに説明されようとも歌を遠巻きに見ている状態だ。しかしいったん作者から離れた歌は読者にとってもはや「そこ」でない。身に引き寄せて「ここ」として捉える。歌の場面に接近して歌の中を歩き始める。読者は身に引き寄せて桜と水を思う。そして多くの感覚や感情が想像され膨らむのである。美の感覚を説明するのではなく、いったん作者の主観から歌を放し普遍的な美を感じる世界を作り上げる。これが、読者に強い反応を呼び起こし、結果的に作者の感情を伝えることができるひとつの方法だと思ふ。

『オノマトペ』

先に挙げた斎藤史の歌の中で、笛の音が異世界に読者を導く役割を担っているように思うと述べた。そのような力が、オノマトペにもあると思ふ。

闇が息をしてゐる 死者が息をしてゐる
ふはーッ ふはーッと停電がくる

渡辺松男『雨^かる』

歌意は、「何か心配がする。闇が息をしているように感じる。それは死者の息のように生命感のない不気味なものだ。

その闇の中停電が来る。停電は恐ろしいげな声を出す魔物のようだ。」ということであろう。本来、闇や死者は息をしない。停電が生き物のような声を立ててやってくることもない。作者は余計な説明要素を詰め込まず、あり得ないことを言い放つ。こうしてしっかりと読者に不気味さを伝えている。「ふはーッ ふはーッ」のオノマトペは実に新鮮だ。停電には声がないのであるが、停電を擬人化し獨創性のあるオノマトペを用いている。獨創性があるオノマトペには、作者が創り出した世界に読者を誘い込む力がある。このようなオノマトペが導く世界を感じられる歌を次に挙げる。

はばからずああああああああと啼く
春日^{かすが}の杜の古鴉啼く

安立スハル『安立スハル全歌集』

しゆわしゆわと馬が尾を振る馬として在る
寂しさに耐ふる如くに 杜沢光一郎『黙唱』
しゆるしゆしゆしゆ隅田川辺に花火咲く下
にねむれる空襲の死者 影山一男『若夏^{わかたつ}』

*

読者の感覚に働きかける、説明を省いたり論理を入れ替える実験的な修辞の試み。現象を整理して新しい世界に再現する創造性に、私は可能性を感じる。作者の表現したいものはつきりしていなければ、読者はついて行けない。そして訳の分からぬ歌になり、この方法は成功しないだろう。既製の枠にとらわれず、核となるイメージから真摯に新しい世界を創り上げようとする。そのエネルギーに私は惹かれるのだ。